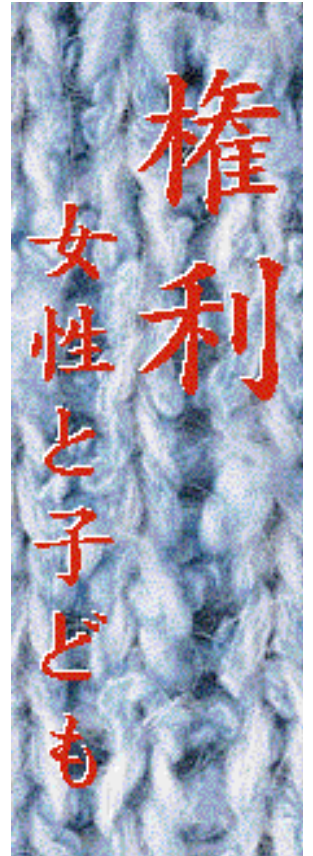




(中絶に反対する運動)

PRO-LIFE NEWS

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号



「私達は悪徳中絶産業と望まない中絶を強める人から女性を守る必要があります」

中絶論争は女性の権利対胎児の権利という構図なのでしょうか。いいえ、それはちがいます。そのように中絶賛成派の人達やマスコミが作りあげたのです。彼らにとつて、この女性対胎児という構図が非常に都合がよかったのです。

その論争の構図を正しく作り直す必要があります。ただ単に、胎児の権利に関する部分を強調するだけでは十分ではありません。中絶の問題の正しい構図とは、女性と子どもとの権利対女性を食い物にする者達のたぐらみと中絶産業の利益だと私達は強く主張しなければなりません。

【女性解放・中絶反対運動】に反対する人は誰でも女性解放反対論者と呼ばれて当然です。強制を支持する人は自由の敵です。この論争の構図を組み直す事は易しい事です。しかし、中絶反対の人々が、新しい事実や主張をよく知る事はぜひ必要です。

まず第一に、論争には協議事項が必要です。この協議事項には次の要求を一つ以上を満たす法律制定への支持が含まれるでしょう。

1. 望まない中絶を強制される事がないように女性を保護する事。
2. 中絶に関して、女性が自由に、十分に説明を受けた上で決断できる権利を保証する事。

3. 肉体的精神的余病を引き起こす危険性の高い特性の有無を適切に診断するように医者に要求して、障害を受ける可能性の高い女性を守る事。

4. 女性が本当に自由意志で、十分に説明を受けたうえで中絶をする決断ができるように中絶医がしなかつた場合や医師が患者の危険因子を適切に捜し出す事ができなかった場合には、非常に長い時間が経過していても、中絶が原因の肉体的精神的障害に対して損害賠償を請求できるといふ、障害を受けた患者の権利を拡大する事。

第2に、中絶反対の論議は、全ての中絶に関わる問題が、悪徳中絶産業や女性に望まない中絶を強める人々から女性を守る必要性の方向に

変えられなければなりません。全ての問題がこの必要性の方向に向けられて、【女性解放・中絶反対】の協議事項が提起されるのです。

第3に、この問題が提起されるたびに、相手方は、女性が望まない中絶を強制されないよう守る特別な法律制定への支持をするように要求されるべきです。その目的は、相手に女性解放の立場にたつた中絶の法律に同意させて、過激な中絶賛成の支持者を相手から遠ざけさせたり、そのような女性保護措置に反対させる事によつて、彼らが、女性の解放よりも中絶産業の利益を守る事に関心がある姿を浮き彫りにさせる事なのです。

私の経験では、ひとたびこの問題が提起されれば、中絶選択賛成派の人を含めて全ての人が強制中絶が行なわれていると認めます。中絶は妊娠した女性自身よりも、その相手の男性や両親にとつてしばしば都合である事は周知の事です。彼女以外の人々が、そうすることが全ての人のとつて一番いい事だと言つて、女性に望まない「安全で合法的な」中絶をするように圧力をかける事がどれほど多いかを理解することはたやすいでしょう。

中絶賛成派の倫理学者である、合衆国のヘイスティングセンター所長のダニエル・キャラハンでさえ次のように述べています。「男性が自分達に都合の良いように、女性に望まない中絶を長い間強制してきたのは、よく知られていますが、とりざ

たされる事はめつたにありません。女性の約30%が、その女性本人ではなく、他の誰かが望んだために中絶をしたというデータがあります。」自らを選択賛成派と称する人々ですら強制中絶を止めさせる努力は妥当で必要なことだと認めるでしょう。

この問題に対する解決は簡単です。中絶をする時、100%女性の選択によるもので、他から中絶を強制されていないと確認しなければならぬという法律上の責任を中絶医に負わせるのです。もし中絶を行なう医院や病院が、患者の適切な診察を怠れば、望まない中絶をするように圧力をかけたという罪の「共犯」としての責任を負わせるのです。もし中絶医が女性に「中絶以外選択の道がない」と感じさせるような圧力を加えたり、あるいは、女性が望まない中絶を強制されないように何もしなかつた事を後に女性が証明できれば、望んだ子どもを誤つて死なせてしまつた事で医院や病院に訴訟を起こす資格が女性に与えられるべきです。

このことは当然です。というのは、望んだ子どもを中絶で失う母親の精神的な苦痛は、不注意なドライバーに子どもの生命を奪われた母親の苦痛と全く同じだからです。

私達はインフォームドコンセントで女性の権利を守る事に注意を集中しなければなりません。

女性の「選択をする権利」は「知る権利」がなければ、全く意味を持

たないといっている人が分かって
います。どうして選択派の人々は
女性の選択する権利を擁護してい
ると言い、同時に女性が中絶の危
険や、ほかに取り得る手段や、胎
児の発達について知る権利を「制
限」すべきだと主張するのではし
ょうか。

世間一般の人々を教育する最良
の方法は、中絶は女性を助けるど
ころか、女性の暮らしを悪化させ
るだけだと教える事です。「母親を
助けなければ、子どもを助ける事
はできない。子どもが傷つけば、母
親も傷つく。」という自明の理を
じっくりと考えるべきです。

この密接な母子関係は、神が造
りたもうた条理の一部なのです。
したがって、胎児を守る事は、母
親を守る事の自然の副産物なので
す。結局、胎児を育てるのは母
親だけなのです。女性以外の全て
の人々ができる事は、母親を育て
る事だけなのです。

そうであるならば、「女性解放・
中絶反対」の協議事項の中核は「子
供にとって最も良い事と母親に
とって最も良い事は常に同じであ
る。私達は両方を助ける事によっ
てそれぞれを助ける事ができる。
もし、どちらか一方を傷つけば、
それは両方を傷つける事になる。」
という事です。

私達の協議事項の目標はこの現
実を理解する方向に社会を導いて
いく事です。それは、母親の利害
を胎児の利害から切り離す中絶賛

成運動の逆の事をする過程なので
す。もし、両者の利害が別の物で
あれば、母親の利害と胎児の利害
に潜在的な対立が存在し、必然的
にどちらか一方が優勢になります。

私達は、このような考え方を全
く受け入れる事はできません。中
絶問題を、母親対子ども問題と
いう構図にさせようとするいかな
るイデオロギーに対しても戦って
いかなければなりません。

私達は女性解放賛成であり中絶
反対なのです。私達は、母親と子
どもの両方を助ける事ができ、ま
たそうすべきだと信じています。
私達は、合法化された中絶は女性
の権利にとって前進ではなく、世
渡りの上手な人や、中絶医や、危
機状況にある女性を食い物にす
る人々にとっての前進だと信じて
います。

上記の協議事項は女性を守り、
生命を救う事になるでしょう。し
かしそれはまた、中絶は「安全だ」
という神話を攻撃し、世間一般の
人々に中絶がはらんでいる女性に
とっての真の危険について教える
でしょう。中絶を受けた女性の危
険が正しく理解されて初めて、大
多数の人々は子どもを守る責任を
一人一人が持っているのだと認め
る事でしょう。

人間の生命は受精の瞬間から
始まります。命は母体の中で始
まります。この時点では、精子に
運ばれてきた23の染色体が卵
子に運ばれてきた23の染色体
と合体して46の染色体を持つ
新しい細胞である人間を形成す
るのです。これが新しい人間の
誕生です。46の染色体の一つ
一つが、新しく生まれてくる赤
ん坊に必要な遺伝情報を持つ遺
伝子によって構成されています。

人間の生命は受精の瞬間から
始まります。命は母体の中で始
まります。この時点では、精子に
運ばれてきた23の染色体が卵
子に運ばれてきた23の染色体
と合体して46の染色体を持つ
新しい細胞である人間を形成す
るのです。これが新しい人間の
誕生です。46の染色体の一つ
一つが、新しく生まれてくる赤
ん坊に必要な遺伝情報を持つ遺
伝子によって構成されています。

なぜコンドームは

エイズ予防の決め手にならないか

エイズに関する州知事審議会
は、最近、ニュージャージー州内
の公立学校で、コンドームを配
布することを答申した。

もし、彼らの意図が、エイズ伝
染の予防であれば、この審議会
の答申は、とんでもない間違い
であろう。人工避妊のためにコ
ンドームを使用するときさえ、
失敗率が高いというのに、この
致死的疫病にかかるのを予防す
るためになぜコンドームなのだ

ろう。

エイズ・ウイルスは精子の四
百五十分の一のサイズしかない
ので、コンドームの効果は、人工
避妊の時よりかなり低いと言え
る。ラテックス・ゴムには、本来、
エイズ・ウイルスより少なくと
も五十倍の大きさの穴がある、
ことはよく知られた事実である。
「本来」ということは、そのよう
な穴があることは避けられない、
ということである。それは、この

基本的事実

あなたは知ってましたか？

人間の生命は受精の瞬間から
始まります。命は母体の中で始
まります。この時点では、精子に
運ばれてきた23の染色体が卵
子に運ばれてきた23の染色体
と合体して46の染色体を持つ
新しい細胞である人間を形成す
るのです。これが新しい人間の
誕生です。46の染色体の一つ
一つが、新しく生まれてくる赤
ん坊に必要な遺伝情報を持つ遺
伝子によって構成されています。

この最初の段階で増えたり減つ
たりする遺伝情報は一切ありま
せん。その赤ん坊は遺伝学的に
はすでにもう一人の人間になつ
たから、「彼」または「彼女」の
どちらかなのです。

要するに生命擁護派の人とい
うのは、受精した瞬間から死に至
るまでの何の罪もない人間の生き
る権利を、その年齢や健康状態や
依存状態に関係なく守るために活
動する人達のことなのです。

材料をどんなに念を入れて製造、
製品化しても、また、その取り扱
いに気をつけても、そのように
しか作れない、ということであ
る。だから、このような穴はコン
ドーム、手袋、その他すべてのラ
テックス・ゴム製品に見られる。
ゴム化学とその技術の専門家、
この分野の研究者、米国化学協
会新聞の編集者として、私は、コ
ンドームを使用すれば、エイズ・
ウイルス保持者との安全な性関
係が持てるとする考えは、愚か
しい、としか思えない。この目的
のためにコンドーム使用を推進
することは、危険であり、無責任
極まりない。

Om.Roland.CamdenCourierPost,1/26/93

子ども達はどこへ行った？

「女性に真正正銘のデータ。一億人が行方不明」これは一九九一年十一月五日付のニューヨーク・タイムズ紙の見出しです。実際には、行方不明なのは一億人の女性ではありません。一億人の女性なのです。先程の記事は次のように続きます。「アジアでは少なくとも六千万人が、女の子であるために行方不明であり、おそらくは死んでいるものと思われる。」アジアの国々、特に中国とインドでは、近年の統計で男女児比に明らかかな歪みが生じています。

さらに最近のニューヨーク・タイムズでは（一九九三年七月二十一日付）、女兒に対して男児が劇的に増加していると報道されています。公表前の統計結果があまりにひどかったため、中国の政府当局は秘密にするよう命じたとされています。女兒に比して男児の人口を増やしている犯人は、明らかに超音波スキャナーです。中国の廈門（Xiamen・アモイ）のある農民は、こう話しています。「去年、村で生まれた女の子はたった一人だ。あとはみんな男の子だった。」35ドルの賄賂か1カートンの煙草で、医者や赤ん坊の性別を教えるように口説き落とされ、「女の子だったら中絶する。」こうして中

しています。

現在、アメリカ史上初めて、65歳以上の人口が18歳以下の人口を上回りました。上院議員のエドワード・ケネディ氏はこう言っています。「第二次世界大戦以来初めて、アメリカは恒常的な労働力不足に直面している。労働力と技術力の不足に。」

コラムニストのベン・ワッテンバーグ氏は、「我々のような社会的システムでは、労働を担う世代が金と同時に次世代をも作り出さなくてはならない」と書いています。また、ミネソタ州立ウィノナ大学の経営学教授であるJ. H. フォーゲン氏は、「モラルや倫理上の理由で中絶禁止に投票することを望まない人々は、自分達の将来の経済的支援のために禁止に賛成した方がよい」としています。

私達の身の周りでも、小学校の児童数は減っており、閉校する学校も出ています。実際、学童のいる世帯は一九九十年には全体の62.5%にも落ち込んでおり、一九九三年七月号のアトラクステック誌ではこれを「最新の少数派」と呼びました。一九八五年には、一九六九年に比べて全国の小学生が八百万人減少しました。つまり、学童人口は毎年五十万人以上のペースで落ち込んでいくことになります。

日本もまた、急落する出生率（現在一世帯に子ども1.5人）と驚異的な平均寿命の伸びに、出生不足

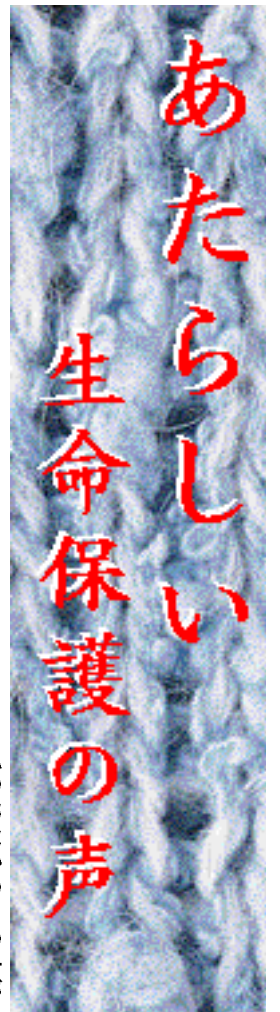
に悩んでいます。日本政府は、将来の労働力不足、低い経済成長、そして増加する税負担を懸念して、出産を奨励しようとしています。日本全体の人口一億二千四百万人のうち、15歳以下が占める割合は「24%で、第二次世界大戦前は36%でした。日本ではバースコントロール用のピルは認可されていません（医学的に危険であるとされています）が、中絶や避妊、コンドームは日常茶飯事です。また、全国的に3Kの仕事（汚ない、きつい、危険）の労働人口が減少しており、女性はいずれも全ての穴埋めをせねばならない社会的重圧を感じています。つまり年老いた身内を世話し、不足する労働力を補い、なおかつ次世代を作るべく子どもを生む、ということなのです。

子ども達は、一体どこへ行ってしまったのでしょうか？彼らはつまり、選ばれなかったのです。現在ほどに子どもをよしとしない風潮が世の中にはびこったことがかつてあったでしょうか。育児の重荷から逃れるために、今ほどさまざまな方法がある時代はありません。米国の出生率は着実に低下し、今では1.08人、人口補充水準を下回っています。一部の人々や国では、遅延しながら子どもを天からの授かりものであると気付いています。

かつて子ども達の世代が生殖年齢に達し、次世代を作り出す時期に入ります。今や現代産業社会に住む人々は、生殖能力の自由落下のただ中にあり、それはやがて力のバランスと文化的・民族的組織の変化を伴う社会的著しい変容を引き起こすでしょう。その典型例として、「フランスのイスラム化」ということがよくあげられます。これはフランスの科学者エマニュエル・トレンプレイ博士が予言したこと、現在のよう傾向が続くと、フランスは40年以内にイスラム教国になるだろうというものです。フランス政府によって製作された広告には、赤ん坊が写っており、「フランスは子どもを必要としている」と書かれています。

一九六十年にバースコントロール用のピルが出現して以来、米国の出生率もまた同様に下がり、さらに避妊や一九七三年の中絶の合法化がそれに拍車をかけ、結果として三千万人もの胎児が死ぬことになったわけですから。ほとんどのアメリカ人は、自分達の小さな細工や次の世代に対するしたい放題の殺人が何をもちたらずかを、気づいてさえいません。アメリカの出生率は、日本やフランスのそれほど低くはありませんが、近づきつつあります。

壁にこんな落書きがありました。子ども達が死ぬ時、その国も滅びる、と。



一九八十年に私はレイプされ妊娠した。中絶することに決めたのだが、そのことが私をプロ・チョイスの運動へとかき立てていった。その運動に参加している友達の誘いを受けて、私は主に事務の仕事をしながらか積極的にその運動に参加した。私の夫も後に加わって、一九九一年まで活動を続けた。

この間、私は自分のことを「子どもをつくっていない」と呼んでいった。それが夫にとっては悩みであった。一九九十年初め、なぜ子どもが欲しくないのかと徹底的に心を探ってみたところ、私の考え方に変化が生じ、子どもを生むことを考え始めたのだった。これは私のような人間にとってはなんとも劇的なことだった。なぜなら、私は子どもは欲しくなかった上に、出産の時の苦痛やもしかしたら帝王切開になるかもしれないという恐怖がぬぐいきれなかったからである。

その年の終わりになって、私たち夫婦は子どもを生もうと決意した。翌年の3月に妊娠し、出産前の病院通いを始めた。(皮肉なことに、医師は私が数年前中絶をしてもらった同じ人であった。)10週間

検診のとき、医師はおなかにドブトーンと呼ばれる胎児用モニターを当て、赤ん坊の心臓の音を聞かせてくれた。こんなに早くから心臓が動き始めるとは、私は非常に驚いた。その時点の私は胎児の発育について何の知識もなかったのである。

医師は、胎児の心臓は受精後3週間で活動を始めることを教えてくれた。それを聞いて、私は中絶した子どもがこの子と同じだけおなかの中で生きていたことに気づきはつとした。しかも同じ医師が数年前にその子を殺したのである。私は自分の息子を超音波モニターで見た。そしてあまりの発育ぶりにあぜんとしてしまった。その子は子宮の中で小さな足を蹴り、小さな腕を振っていた。私は気持ち悪く揺さながら病院を後にした。科学的現実には打ちのめされたのだった。

妊娠に幸せを感じ、医者から聞いたり見せてもらったりして学んだことを実行していこうとするうちに、私は生命保護者たちに対する自分の気持ちと和らいで行くのを感じた。しかも奇妙な考えが浮かぶようになった。例えば、もし

私のおなかの中の子が口がきけら、あの子は当然生命保護者であつたらうー」

ちょうどこのころ「命、何とすばらしい選択」というコマーシャルがテレビに流れ始め、私はそのCMを気に入っていた。妊娠している身にはとても肯定的でとても刺激的なものだった。だからプロ・チョイスのグループがこのCMに抗議し、放送中止を求めるという記事を読んだ時、私はかなり困惑し、それと同時に憤りを感じた。まだ、プロ・チョイスを支持していた私の夫さえ、プロ・チョイスのグループの対応に困惑し混乱していた。そのコマーシャルはとても肯定的なもので中絶など全く口にしていないのに、なぜ彼らがこれほど騒ぐのか、私たち夫婦は考え、するとそのとき、私は無意識に自分の大きくなったおなかを手で覆っていることに気が付いたのだった。

私は生まれながらにユダヤ人だが、息子を身ごもった時はそれほどユダヤ教を信仰していた訳ではなかった。それでもやはり子どものために神に祈った。すでに高齢のためこれ以上妊娠することがで

きないのではないかと思つて祈つたのである。息子の出産は、私が最も恐れていた帝王切開だった。

しかし手術が終わると医師は信じられないといった表情で、どうやって私が妊娠できたのかと問いかけた。彼は手術の際に、女性が年をとるにつれ起きる卵巣の状況を説明し、たいていの場合これが不妊につながるのだと教えてくれた。特に私の場合はひどく、それが原因で何年もの間ひどく不規則で時には全く訪れない生理に悩まされた。更に、この状況にある女性はほとんどの場合ホルモンの治療をまず受けてからでなくては妊娠できないし、妊娠できたとしてもたいてい流産してしまうことを話してくれた。

これを見ると、神様が起こしてくださった奇跡を除いては、一九八十年に私が中絶した子が、もしかしたら私が母親になる唯一のチャンスだったかもしれないことを振り返ってみた。息子の名前はデイヴィッド・サミュエルに決めた。デイヴィッドはヘブライ語で「いとしい」という意味で、サミュエルが「神に必要とされた」という意味があるからだ。息子を妊娠させて下さった神への感謝の意味もあって、私たち夫婦はその後熱心なユダヤ教信者になった。

デイヴィッドが生まれて何ヶ月かが経ち、私はどうとう勇氣を出して医師がどうして超音波での検診をしながらも中絶を実行できる

のかと聞きに行った。すると彼は超音波上級研修を終えた一九八十年半ばに、中絶するのをやめたというのだった。彼は明らかに私と同様、超音波のモニターで見たものを否定できなかったのだ。デイヴィッドがまだ1歳のときに、私は娘シャイナを身ごもった。彼女はいわゆる「予期せぬ」子どもだった。確かに私は数ヶ月間自分が風邪をひいたものだと思つていたので、妊娠検査を受けると、すぐにデイヴィッドに兄弟ができるということが確認された。プロ・チョイスとしては「すべての子は計画されたいが、欲しがられてきた子だ。」という叫び声が聞こえてくる。以前私が信じていたプロ・チョイスのイデオロギーがまだ残っているのかもしれない。つまり、私の人生の喜びである娘がゴミのように引きちぎられてしまうかもしれないというのであった。

娘の名前はシャイナに決めた。ヘブライ教の名前はシーフラである。シーフラは、聖書の中で男の子の赤ん坊を殺すようにというファラオの命令に背いたヘブライ人助産婦である。私はこの子に、ユダヤ人の生命保護者として歴史に名を残っている人の名前をつけたかったのである。

私はデイヴィッドを身ごもっている時に、更に別のことを学んだ。私と姉は11歳離れているのだが、その理由はずっとわからずにいた。私が妊娠して初めて父はその過去

について話してくれた。つまり、父の血液型はAプラスで母はOマイナスだったのである。私の姉が生まれると、医者は母にもうこれ以上子どもは作らないようにと警告したのだった。

原因は最初の妊娠によるRh抗体がその後の子宮内の赤ん坊をだめにしてしまったためであった。私は、自分の娘と同様、「予期せぬ」子だった。母は私を生み、私は今日までこうして生きている訳だが、それは単に一九五九年当時は中絶が違法とされていたからである。私の血液型は父と同じであるが、なぜだか私はRhによる合併症もなく健康な子として生まれることができたのだった。

母はもしかしたら全く健康な赤ん坊を殺していたかもしれないのだ。これは私にまた新たなことを気づかせてくれた。つまり、もしおなかの赤ん坊が本当に母親の体の「一部」であるならば、なぜ母親と違う血液型をもつことがよくあるのだろうか。独立した生き物のみが別の血液型と別の血液組織を保てるのだ。

私は十代の初め頃から動物擁護運動に参加してきた。動物虐待の撲滅に22年間費やしてきたことになる。そこで動物にも感覚というものがあることを知り、痛みを感じる能力があることを知った。何年もの間、私はおなかの赤ん坊が無害の動物と同類であることに気が付かずにおいた。どちらも無力で口

がきけず、虐待されたり殺されたりと激しい苦痛を感じるのがある。それから私は動物の苦しみを無くすために菜食主義者になったのだが、それでも吸入器で引き裂かれる苦しみをもらったおなかの子どものことには気が回らなかった。おそらく中絶体験が私の道徳的無知を引き起こした上、自分の「選択」を正当化しようと必死だったのだろう。ハツシエム(創造者)は私の無知を許して下さったと信じている。そしていつか自分を許すことができる日も来るだろう。

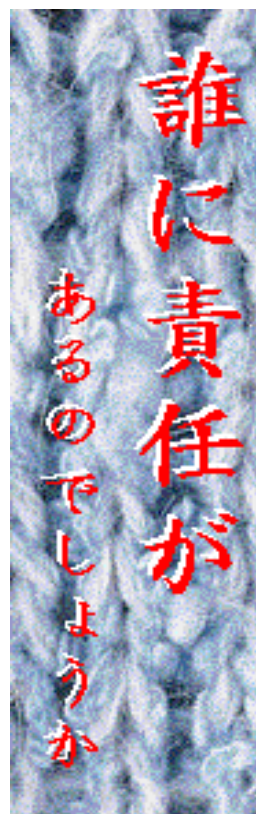
デイヴィッドを身ごもっている際に胎児の発育についていろいろと学んだ訳だが、その結果、自分が墮ろしてしまっただけの子がどんな子であったかをあれこれ考えているのに気づく。もしその子が男の子であれば、今年でバル・ミツバー(ユダヤ教で13歳の男子の成人式)を迎えるはずだった。そんなことをよく考えるようになった。デイヴィッドとシャイナにもお兄さん(あるいはお姉さん)がいたはずなのにと思う。一体どんな目の色をして、髪の手はどんな色だっただろうか。世界にどのよう貢献してくれていただろう。その子は無知で自己中心的な私を許してくれるだろうか。

中絶された赤ん坊の写真を見たり、子宮の中でも赤ん坊が痛みを感じることができるといった内容のものを読むと、私は自分がしたことに恐ろしくなり身がすくんでしま

まう。私のわがままでどんなにつらく苦しい最期を遂げたことか！それでも私に新しい人生を与えてくださり、苦しみから救い出してくださいました神様に感謝するのである。

プロ・チョイス派、プロ・ライフ派そして母親と変化を遂げてきた私の話しが、合法的に認められている中絶に挑戦しようとしている人達を奮起させることができると思う。更に自分の内面を見つめて、中絶が単に母親と医者間の個人的な問題であるという今日の「知恵」と戦ってくれるようになればいい。中絶が母親と医者だけの問題だという時、それはある人を無視している。つまりおなかの赤ん坊である。あなたも私もかつてはおなかの赤ん坊であったのだ。

HLReprints 1/94pps



きょうは一通のお手紙を紹介しましょう。その内容は、よく私が受け取る手紙とは全く違って、次のようなものです。

「私は中絶に反対ですが、男性がいつも罪を女性に押しつけている様子が驚かされます。あなたがたは中絶を殺人だと言いますが、男性が立ち去って子どもに対する権利を放棄した場合はそれを何と呼ぶのですか。男性ができてしまっただけの子どもに対する責任を取れば中絶は減るかもしれないという可能性について、あなたがたが男らしく何かをしたり、言ったりしたことは一度たりとも聞いたことがありません。いつも女性が全ての重荷を背負わされるのです。このことを考慮すれば、私は男性がその大きくなりつつある赤ちゃんに心から関わってくれないうちは中絶がしばしば容易いと思えるのは確かだと思います。」

「多くの男性はまた、離婚後、子どもに対する責任を取りません。そうであるなら、その子ども達に将来何を期待することができのでしょうか。ピルは女性が使うものです。男性は何もせず、何の責任もありません。経済的負担や他の負担も女性にのしかかっています。私は、今こそ、男性に成長して、本当の大人になることを教えるときだと思っております。そして、そうすることは、全てを女性に押しつけることなく、罪や責任を受け入れさせられることを意味するでしょう。神様は、多くの男性が考えているように、男性には罪がないと考えているのでしょうか。私にはそのようなしか思われません。」

この手紙について少し考えてみましょう。明らかに何人かの男性については彼女の言うことは合っています。彼女はまた、良心的で、思いやりがあつて、深く責任を感じている多くの男性に対しては間違った考えを持っています。たとえそうすることを女性に望んだのではない場合でも、中絶したときに多くの男性が経験する強烈な混乱や精神的なショックのことを彼女は知っているのでしょうか。

「多くの男性はまた、離婚後、子どもに対する責任を取りません。そうであるなら、その子ども達に将来何を期待することができのでしょうか。ピルは女性が使うものです。男性は何もせず、何の責任もありません。経済的負担や他の負担も女性にのしかかっています。私は、今こそ、男性に成長して、本当の大人になることを教えるときだと思っております。そして、そうすることは、全てを女性に押しつけることなく、罪や責任を受け入れさせられることを意味するでしょう。神様は、多くの男性が考えているように、男性には罪がないと考えているのでしょうか。私にはそのようなしか思われません。」

たとえそうであっても、赤ちゃんの親である二人が子どもの面倒や教育や養育するためにしなければならぬ責任を平等に負うべきことは疑問の余地はありません。もし男性がそうしなければ、それは間違いです。